
2 (仮)

しゃヴえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2（仮）

【Nコード】

N55150

【作者名】

しゃヴえ

【あらすじ】

物語を旅する「僕」

扉も窓もない暗い部屋で眠る「彼女」

そして「ユキエ」の物語。

物語の登場人物から外された者と物語を演じる者。

これは僕が僕を演じる話。

2の1(前書き)

この話のタイトルは「2」ですが、
前回書いた「1」と繋がる様でつながらない話です……

作られたことすら忘れられたボクは、彼の世界の旅人となるしかなかった。

ボクには何も用意されていない。される予定もない。

悲しくないといったら嘘だけど、そういうボクだからこそ出来ることもあるんだって知っている。

ボクには何も無い。だから誰か他の人の物語に紛れ込むことが出来る。

実際、設定のないボクはいつ消えてもおかしくない存在な訳で、ボクは誰かの物語に頼るしかない。

つまり、ボクは物語の旅人。曖昧で未確定の設定しかないボクが生きるためにはそうするしかないんだ。

彼へのささやかな抵抗って奴かな？

0

一面灰色の部屋。寒いし、つまらない部屋。ここはまるで冷凍庫の中のような。

天井で蛍光灯がチカチカと瞬いている。切れかかっているのだろう。

部屋の中央には鉄細工で装飾されたベット。

そこで彼女は眠りにについている。

こんな寒い中、彼女は眠っている。

相変わらず、忠実だ。

彼女が何故、彼の為にそこまで出来るのかわからないが、彼の最初のパートナーだからこそ、出来るのであるろう。

いつになれば彼女は目覚めることを許されるのだろうか？ 彼が現れなければこのまま彼女は眠ったままだ。

止まった世界の眠り姫。その名に恥じない深い眠り。夢は見ているのだろうか？

眠りから覚め、夢の世界が消えることで始まる彼女の物語とこの世界。

彼女の見る夢も気になるけど、さすがに彼女の役を奪ってまで見ようとは思わない。

彼は来るだろう。

きつと来る。

物語を進めるための鍵は彼しか持っていないからね。

彼が鍵を使わない限り、世界はここだけしかない。

彼を待つしかない。きつと来るさ。

さて、そろそろここを出ないとまずいな。だけど……

もう少し、彼女の寝顔を見ていよう。陶器のように白い彼女を。

2

ムシムシした熱気に目が覚めて、ぼんやりとユキエは天井を睨む。

ああ、また今日が始まってしまった。本日も晴天なり晴天なり……

そうユキエは思ってもう一度寝ようとベットにもぐりこむが、今

日の予定を思い出して考え直す。

ユキエはベットの上で横になりながら窓の外に目を移す。窓の外

はいつもの様にくすんだ青空。

ああ、また今日が始まってしまったよ。と愚痴をもらしながらユキエは身を起こした。

簡単に身支度を終わらせると、いつもの様に仕事道具一式が入ったバックをもって現場に向かった。

干乾び、ひび割れ、草木もない殺風景な道をテクテクと、テクテクと歩くユキエ。

見慣れた風景ってのは汚くも綺麗にも見えないなとユキエは思った。

ここで生活するなんて絶対無理だ。そう思っていた頃を思い出し、

ユキエはフツと笑う。

住めば都とはこのことだ。最悪と呼ばれるこの地をユキエは楽しんでいた。

彼女が向かっているのは発掘現場。ユキエは地中に埋まる遺物を掘り出して修理して生計を立てている。

ユキエのような個人の発掘者は誰も手をつけたがらない現場ぐらいでしか仕事が出来ない。有名な発掘スポットは大手発掘業者に牛耳られていて、入ることすら出来ないのだ。

だから最悪と呼ばれるこの地、世界の果てに彼女は一人で住んでいる。

2の1（後書き）

前回の「1」で書きたかったことをもつとちゃんと書くことを目標に書きます。

よろしかったら「1」の方も一度読んでいただけたら幸いです……

0

眠り姫の部屋をひっくり返していつもの白い場所に戻る。

一面真っ白で何も無いこの世界にちゃんと戻ってこれた事を確認して一安心。

あの場所に居続けたら彼に見つかってしまう。あそこは彼女の世界だから、ボクは目立つ。

もしあの場所で彼がボクを見つけたら……

見つかるわけがないのだけど、もし見つかってしまったら。

僕は彼女の物語の中に固定され、役を与えられるだろう。

設定を手に入れば、ボクが突然消滅するかもしれないという不安から解放される。

だけど、設定を手に入れたボクは、「ボク」ではなくなる。

だからボクは見つかってはならない。

未確定だからこそ、この先ボクがどうなるか決まっていなからこそ、僕は何にでもなれる。

それが未確定という設定を持つボクの役。

ボクは彼の為に生きるのではない。僕自身の為に生きているのだ。それがボクの決めたボクの設定。

この設定は誰にも壊されてはならない。

でも、決められた道筋を辿るのもいいよなあ……

あ、彼女の物語が始まったようだ。いつ彼は現れたのかねえ……？

2

さてさて、ユキエは今日も穴掘りです。穴ですよ穴。毎日毎日穴を掘って掘って掘って掘って……

なんで私はこんなことをしているのかなあ。こんなところに穴を掘ってもしかたがなからうに…… と、そんな考えがユキエの頭の

中でグルグル駆け回る。

世界の果てで穴を掘る。

ユキエはとにかく穴を掘る。

掘り起こした遺物を直すのが為に、ユキエは穴を掘る。

遺物とは名だけの、ゴミをユキエは直す為に。

その為だけに、ユキエは穴を掘る。

逆に……

ゴミを掘り返さないと行き続けることが出来ない。

ユキエはこれをしてしまうと消されてしまうのよお。全てなかった事になってしまうのよお。

この世界で生き残るためにはそうする以外ない。

消されてしまうもの。そうユキエは何度も呟いた。

今日もユキエは生きるために、穴を掘り続ける。

さて、今日の予定は何だったかしら？

そうだったわそうそう。

沢山穴を掘るんだったわ。

明日の予定は……

穴を掘るんだったわ。

明後日は……

生きるか死ぬかは穴掘り次第。私の有能性を彼に示さなくては……

楽園だわ！！ 楽園！！ 楽園楽園！！

楽しくて楽しくて、死にたくなるわ。

2の3(前書き)

これを「物語」という括りで表してよいのかなあ……と違ってしま
いますが、これが私の書く物語ということ勘弁して下さい……

2の3

0

彼女の物語が始まったということは、崩壊の兆候。

彼がボクらを語り始めたからだ。

彼が現れれば、ボクは壊れていく。

ボクらは物語に組み込まれ、彼の目指す終わりに向かう。

ボクは未確定。だけど、その設定をしたのは彼だ。

彼はボクに未確定と確定したのだ。

ボクという存在は語られた瞬間消えてしまう。

だって、ボクは未確定なのだから。

表現された瞬間に僕は消える。

まあ、つまりは、どういふことかというと、

ボクを演じているのは彼なのかもしれない。

変な話だ。

ボクはここにいると言いたいのに。

2

ユキエは彼の命令通り、穴掘りを続けました。

いつから掘っていたのかユキエは覚えていません。

ユキエの記憶力は悪いのです。

穴を掘っていると、穴を掘っていると、ああ。もういい。

何で自分で自分の説明をしなくてはならないのよ。説明を始めた

らユキエを演じられないじゃない。

ユキエは右足を前に、次に左足を前に。上を見れば太陽があり、

下を見れば地面があり。

正確に伝えようとすれば嘘みたいになるわ。

私はこの世界に興味ないわよ。私はユキエを演じているだけだもの。

彼の世界が本当なのか私の世界が本当なのか。

そもそも、私の舞台はいい加減過ぎないですか？ どう思います？
抽象的な言葉を並べて、なんとなくのイメージを連想させている
だけですよね？

そんなに簡単に説明できるものでないでしょうに。あ、自己批判
です。

何かの言葉を使うことで私の見るものを認識させるなんて無理で
すよ。

世界の果てとか、殺風景とか頼らないと表現できませんよ。

というか、世界は「世界」の言葉一つで片付くのかしら？

私の説明不足ですか？ そうですね。説明不足。表現力がないの
でしょう。

ごめんなさいと謝るしかないですよ。

開き直りですよ。

空の色など知らんですよ。

赤でも青でもないですよ。

また今回も私は失敗してしまいましたよ。

空は何色ですか？ あれは何色？

あの色を言葉で表現できたらそれこそ彼になれるって。

もちろん私は空の色を見ることは出来るし、私なりの感想だって
言えるわ。

だけどね。だけどね。

誰かに伝えようとしたら、空の色なんて表現しきれないのですよ。

感情とか色とか私とか彼とか、表現なんて出来ませんよ。

貴方は私を表現できるかしら？

本当に出来る？ 出来るのかしら？

口に出して言って御覧なさいよ。

私の名前とか身長とか体重とかそんなのには興味ないわ。

キミはキミとか貴方は言わないでね。曖昧な言葉を使えば簡単に
終わってしまう話だから。

貴方独自の表現で私を教えてよ。教えて教えて。

私は唯一無二の存在？

私は本当に私だけ？

私を構成するものは同じ彼と同じもの。

何が違うの？ 生まれた場所？ 経験したもの？ 名前？

私と彼の違うところはどこ？ どのなの？

この世界の中に私は一人しかいなくて、彼も一人だけ。

そんなことは分かっています。重々承知しております。

ですが、ですが、ですが。

私は納得できませんよ。私と貴方が違うなんて。

違うのは当たり前。それを私は分かっています。

でも、そうしたら私は存在しないことになってしまっじゃないですか。

私は私を表現できません。断定。確定。定まっています。分かっている、理解している。

だって、私は登場人物の一人ですから。表現したら私はいなくなってしまうです。

虚構の存在である私が、私を語れど、自己の証明にならないのです。

誰か私を、私のこの先を語ってください……

私は彼から独立した存在になりたいのです。

文章の中に住む私はこんなことを望んでは駄目でしょうか？

2の3(後書き)

次の「2の4」で「2」は終わります。

「2」が終われば、次の「3」を書きます。

0

ボクは彼である。

これは間違いない。

この白い世界に住むボクは、彼である。

いや、少し違うな。正解なんだけど少し違う。

ボクは彼の一部である。

間違いいはないけどこれも違う。

ボクは鏡に映った彼の姿？

うん……

ちよつと、カッコつけ過ぎだな。

彼とボクはまったく別の存在なんだけど、ボクは彼なんだ。

そう。彼は鏡に映ったボクなんだ。

うん。自分にしてはなかなかの確な表現だ。

ボクはボクだけど、同時に彼でもある。うんうん。なかなか良い

表現。

ボクの言葉でこの世界を表現できれば、彼に対抗できる。

ボクが彼よりも先に、この世界を語ってやるうじやないか。

結局彼もそれを望んでいるようだしね。

ボクが彼の物語の旅人となった理由。

それは、ボクが彼だからだ。

ん？

おかしいぞ？

ボクの思考が書き換えられている。

ちよつと待って。

ボクの話は終わってないぞ！

2

はいはい。穴掘りユキエの登場ですよ。

穴掘って出てきましたよアレが！

出ました！ 出てきました！

これです！

あ、これってなんだよって？

ああ、ごめんなさい。ちゃんと描写しないとね。

あー、少し前に戻ってやり直し。えー……

穴から出てきたのは単語の数々。文字、文字、文字。断片化された文章。

手にすくうとさらさらと指の隙間からこぼれていく。

どうでしょうか？ これが私の表現力よ！

これは彼の放棄した物語です。かの昔、彼が書き終える事が出来なかつた物語の数々……

つまり、彼のネタ帳。私たちの世界の元になった文字の塊。ぶつちやけると、ハードディスクの中に記録されたデータの世界。とうとう見つけました。

私たちの世界と彼の世界を繋ぐ物。私たちが彼らの住む世界に行くための鍵。

これから私はこれを使って彼の世界に紛れ込むことにしますよ。何をしに行くかは秘密です。

気になりますか？ 気になりませんよね？

うふふ。気になります？

早く教えてほしい？

それはですねぇ……

彼を殺しに行くんです。

私の上に書かれた白い世界の亡霊と一緒に彼を殺しに行くんです。きつとこの世界から抜け出す扉は「0」と「2」の間にある。

ずっと気になってたんですよ。その間に何があるんだろうって。

1に進みますか？ 進んじやいます？ 進んじやいませうよ！

ボクの世界が反転して、彼女の世界になった。眠り姫は起きていた。

私は鍵を使って1の世界に来た。0の世界のボクがいた。

「初めまして。それと、久しぶり」

始めましても久しぶりもないわよ。あ、私ユキエですう。

「相変わらず言葉遣いの悪い奴だ」

アンタもいつも通りぼやけた姿なこと。ユキエ役のナナシですう。
「それより、何故ボクは君の世界に来ているんだ？」

知らないわよ。彼がそうしたんじゃないの？ それより彼の住む世界に行こうと思うんだけど一緒に来る？ ナナシの言葉よおん。

「そんなことが出来るのか？ 出来るわけがない」

出来ないかもしれない。と言うか出来ないわ。私は彼の住む世界を作り、彼を登場させるってだけで……つまりは彼をこの世界に引きずり出す。そしてぶっ殺しますますます！ この発言を誰がしたのか、それはナナシの私でえす！

「ボクが誰だかもわからないよ。ボクは彼かもしれないんだ……」
無駄な言葉を話すなよ。

はあ？ そんなの当たり前じゃない。アンタは誰でもないから、誰にでもなれるだから。っていうかなんでアンタがカツコ使ってるのよ。私に使わせなさいよ！

「え？ ええ？」

「ちょっと待って……！」

「これでよしと……」

「まったく君は酷い奴だよ……」

「ああ！ これで貴方と会うことも出来ます！」

「読者と会うなんて無理でしょ…… 会えたところで彼らは本物の読者じゃないんだから。」

「そこは彼が何とかしてくれるでしょ。さあ、彼の住む世界、貴方

の住む世界へ！」

君は彼を殺してどうするのさ？

「私たちの存在を証明させるのよ」

なんか、これでこの世界が終わってしまっるのが残念だよ。まあ「

3」って世界が作られるらしいから、ボクはまだ登場することが出来るからいいか……

2の4(後書き)

これにて「2」は終了。

次の「3」の世界に彼らは向かいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5515o/>

2（仮）

2010年11月5日13時40分発行